『　キリスト教葬儀の心得　』

キリスト教葬儀は初めてという方のために、簡単な案内をさせていただきます。

キリスト教の葬儀には、次のような意味があります。

・故人に対する最後の敬意を表し、御遺体を丁重に葬るために
・悲しみの中にあるご遺族を慰め、励ますため
・参列者自身が、故人の一生から何かを学ぶため
・故人の一生を導かれたいのちの創造者を礼拝するため

式の流れとその意味

1. 聖書には、唯一絶対の創造者である方がおられ、人間も含めてすべてのものは、その方によって創造されたと記されています。それゆえに、人間はどこまでも人間でありますから、キリスト教では、いかにすぐれた人物であろうとも、心からの尊敬は表しますが、死者を拝んだり、その霊に願い事をしたりすることはいたしません。故人の身体は土に戻り、その魂は創造者の手に戻ると信じるからです。

2. キリスト教葬儀において私たちは、いのちの創造者のもとに帰られた故人を偲びつつ、人間の生命の生滅に厳粛な思いを持って、主イエス・キリストにある永遠の命の希望を抱きながら、一連の葬儀を執り行います。

3. 葬式は式次第に従い牧師の司式によって進められますのでご安心ください。讃美歌を賛美し、思い出や慰めの言葉に耳を傾け、祈りの時は黙祷の姿勢をとって下されば結構です。

讃美歌は、かって同じような悲しい別離を越えてきた信仰者の心情吐露であり、また、創造者への信頼の告白です。ご存知でしたら歌っていただき、そうでなければ静かに耳を傾けるだけで構いません。

祈りは、悲しみの中にあるご遺族に、人知を超えた創造者からの慰めと励ましがあるように願う時であり、遺族や参列者の人生にこの方の守りと導きを願う時でありあます。祈りに賛同される方は、最後に「アーメン」と唱和します。

説教は、故人の人生を紹介し、故人の生き様から何かを学び、死の意味を問いかける時です。また悲しみの中にある遺族に、聖書から慰めを語りかけます。人間の生命をつかさどる永遠なる創造者の前に、死を自覚した私たちが謙遜になって、この方の前に跪く時です。

献花・飾花も、故人を拝んだり、故人に対して何かをする信仰儀式ではなく、故人に対する感謝と敬意を表す行為です。また、献花の後に悲しみの中にある遺族に、心からの慰めの言葉をかける時です。

4. 教会の葬儀は以上のように、故人に敬意を表して，丁重に遺体を葬る時です。クリスチャンにとっては、死という厳粛な事実を前にして、人間の生命をつかさどる創造者を礼拝することであり、それゆえに生花飾りには、名前の札を用いず、生花のみにて飾ることにしています。なお親族や親しい関係者の名札はロビーに掲げることができます。

5. 慈しみに満ちたいのちの創造者を信ずるキリスト教の葬儀には「縁起が悪い」などのタブーはありません。ひたすら故人への敬意を表して、ご遺族をお慰めすることを最優先して執り行うものです。キリスト教葬儀が不慣れのための行き違いがあってもご安心ください。ご遺族も教会も、皆さまの誠意をお受けいたします。

あなたもキリスト教葬儀で大切な方とのお別れをご提案します。そこには人のいのちの創造者なる方の、慰めに満ちたお別れを経験なされるでしょう。

編集　キリスト教葬儀　恵みとまこと（ｸﾞﾚｲｽ＆ﾄｳﾙｰｽ）